

Title	"Pearl"に於ける言語の研究
Sub Title	Language of Pearl
Author	安部, 博史(Abe, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.24, (1967. 12) ,p.234(59)- 261(32)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00240001-0261

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

“Pearl” に於ける言語の研究

安 部 博 史

OEに比較して、MEの屈折語尾の数はきわめて少ないことは英語史の『上の一特色である。そのため、屈折語尾を有する語、即ち、名詞、代名詞、形容詞、動詞に於いて、同形語尾の使用がみられる。又、名詞、代名詞などでは格語尾に同一語尾の併用がみられ、動詞では単数、複数の両形に同一語尾の使用がみられるといった現象が生じていて、かえって語意、語形の判読が難かしい場合が生じてくる。*Pearl* に関しても、そのことは例外ではない。しかし、上述のような言語上の特色をいかして、巧みに、単純軽妙かつ優雅な作品の創造に、この詩の作者は成功しているように思われる。その魅力は、諸種の適切な寓話や象徴の織込まれた詩の内容に負うことも大きい⁽¹⁾が、同時に作者の鋭い言語感覚による言語表現にもあると思われる。Chaucer が活躍して、言語、文学に近代英文学の基礎をきづいたと同じころに、OE時代の文学伝統に従い、彼の作品に遜色ないと思われる文学が North-West Midland⁽²⁾ で書かれていたことは注目に値する。*Pearl* の詩人は此のような文学伝統の中で育ったと考えられる。そうして、この *Pearl*⁽³⁾ は、文学的主題を別にしても、その詩形の単純さ、文体の軽妙さ、そうしたものを生み出す、Alliteration, rhyme などの諸種の作詩上の技法の冴えが、この作者の秀れていることをはっきりと示している。しかし、筆者には限ぎられた紙数で *Pearl* 論をなすことはとても

(1) 作者の名に関しては不明、なお、*Pearl* という題名も後世に於いて与えられたものである。

(2) 特に Alliterative Revival として知られている。

(3) *Pearl* は E. V. Gordon によれば Ca. 1360-95の間に成ったものとされている。

Gordon, *Pearl*. 1963, Introduction, p. xliii-xliv.

不可能なわざである。ここでは、語形、語法を中心に、構文上、特に *Pearl* の中で注目し値すると思われるものを扱った。

I Accidente

ここでは、名詞、代名詞、形容詞、動詞、所謂、inflexional words の語形と注目すべき語法を中心に扱った。

名詞 (Nouns)

名詞は 6 種の語尾を持つほか、単数形では無語尾の場合もある。これを図示すると下記のようになる。

格 \ 数	单 数 (sg.)		複 数 (pl.)
主 格	-e	—	-eȝ
对 格	-e	—	-es
属 格	-eȝ	—	-esse
与 格	-e	—	-ȝ, -s

〔1〕 単数形 (Singular Form)

(a)主格 有語尾の例, *breste* 18, *stounde* 20, *sede* 34, *corne* 40, *goste* 63, *mone* 1069, *perle* 1192, *ioye* 1197, etc. 無語尾の例, *spot* 25, *reflayr* 46, *odour* 58, *anger* 343, *answar* 518, etc.

(b)対格 有語尾の例, *happe* 16, *hele* 16, *iuele* 23, *perle* 53, *acorde* 509, *name* 872, etc. 無語尾の例, *color* 22, *erber* 38, *lyȝt* 69, *cyty* 985, etc.

(c)属格 有語尾の例, *Goddeȝ* 63, 591, *maneȝ* 223 *Fadereȝ* 876, etc. 無語尾の例, *wommon* 236, *Lombe* 1141.

(d)与格 有語尾の例, *paye* 1, *spotte* 24, *balke* 62, *foreste* 67, *bale* 651, *worlde* 761, etc. 無語尾の例, *clot* 22, *spot* 48, *water* 107, *weddyng* 791, *affray* 1174, etc.

〔註〕 数字は行数を示す。以後も同様である。

〔2〕 複数形 (Plural Form)

複数名詞に於いて、顕著なことは、格による語尾の区別がないことである。しかし、*Pearl* では、使用度からすれば、上記5語尾のうち *-e3* が圧倒的に高い。即ち、*-es* は *degres* 1022, *Vertves* 1126, *Legyounes* 1121 の3例だけであり、*-esse* は *hevenesse* 735, のみで、*-3* は、*heven3* 441, *-s* は *pyonys* 44, *margarys* 199, *mariorys* 206, *tres* 1077, といった僅かな例を見るだけで、ほかは *-e3* が使用されている。

〔3〕 語形、語法上の特色

(a) 複数語尾、*-3*, *-s* は母音又は *n* の後に来た場合に使用されている。

(b) 主格と与格の単数形に於いて

1) 無声音である場合にも語尾 *-e* が付属している。*Corne* 40, *Goste* 63, *Lompe* 945, *kynde* 55, etc. (以上主格単数); *aunte* 233, *Auguste* 39, ……(以上与格単数)。といった特色がみられる。

2) *-e* が脱落している場合。主格の例, *tresor* 331, *anger* 343, *answar* 518, etc. 与格の例, *marked* 513, *doel* 642, *bok* 710, etc.

3) 或る行では *-e* を有している名詞が、他行では無語尾になっているという不規則な状態が見受けられる。*hert*, 17, 52, 682, 1136, etc. に対し, *herte* 128.

(c) 無語尾属格 (Endingless Genitive) に関しては、Gordon は、この現象は *Pearl* のみならず、*Gawain-Poems* 全体に見られ、更に北方の Text (1) の中にも頻出することを指摘している。興味を引く例は、*quat kyn* (What kind of) (2) で、755, 771で2度出てくる。同様の慣用句でも、*Alle kynnez* (All kinds of) 1028, は *-e3* をとっている。一般的にみて、*Pearl* では属格で *-e3* 語尾をとっている方が多い。

無語尾の例——*wommon* 236, *helle* 643, *Lombe* 1141, *Israel* 1040.

(d) *Men* と *fete* は幹母音変化によって複数になる。*Men*—290, 540, etc.

(1) *Pearl, Sir Gawain and the Green Knight, Patience, Purity*. を意味する。

(2) E. V. Gordon, *Pearl* Oxford, 1963, Appendixes, p. 109

fete—1120. そのほかに幹母音変化による複数形の例として, *schyldereȝ* 214 <OE. *scyldru*がある。が一見して明らかなように, 属格語尾 *-eȝ* を取っている double genitive の形をしている。

(e) OE の複数女性名詞と中性名詞の名残りとして, *honde* 11, 49 <OE *honda*, *chylder* 718, 714 <OE *cildru* がある。*hyne* 505, 632, etc. は OE の複数属格 *higna* をもとに ME 時代に造られたものである。OE の弱変化名詞の複数形の名残りとして, *Yȝen* 184, 254, etc. がある(<OE *eage*)。

(f) 数詞+名詞の場合に, 例えば, *ȝer* 483, *forlonge* 1030 の前に数詞が (各, two, Twelue) きているが, それによって, 名詞の単複を決定するのは難かしいように思われる。しかし, *ȝer* が OE の複数中性名詞, *forlonge* が尺度を示す複数属格でないなら単数形と考えられうると, Gordon は推定している。⁽³⁾

形容詞 (Adjectives)

〔1〕 原級形容詞

原級形容詞の語尾としては, *-e*, *-ly*, *-lych* の3種で, ほかは無語尾である。

(a) *-e* 語尾を持つ複数形容詞は通常脚韻の為に語尾 *-e* が付加されていると考えられる。従って, 行中にある場合殆んど無語尾である。

1) 押韻している場合

crokeȝ kene 40, *grayneȝ dede* 31, *gladneȝ glade* 136, *bygyneȝ stoute* 935, *braypeȝ breme* 346, *boyeȝ bolde* 806, *leveȝ sware* 837, etc.

2) 行中にある場合

rych rokkeȝ 68, *frech flauoreȝ* 87, *crystal klyffeȝ* 74, *rych revereȝ* 105, *rych plateȝ* 1036, *horneȝ seven* 1111, etc.

3) 行中であって *-e* を取っている場合

lappeȝ large 93, *pyse holteȝ* 921, *pose bryddeȝ* 93, etc. それ故, 作

(9) *Ibid* Appendixes p. 109.

者は場合に応じて、使いわけをするという明確な意図があったとも思われない。この論文では言及出来なかったが、Versification による——特に Metre よる、詩的効果を狙って作者は語形を変化させたと思われる。

(b)語尾 *-e* をもつ、弱変化形容詞。

Pearl では、弱変化の形容詞に *-e* がつくのは次の3つの場合に限られている。それらは、1)呼びかけ(Vocative), 2)定冠詞(Definite Article) 3)指示詞(Demonstratives)の後にくる場合である。

1)の例——*My stwete* 325, *cortayse* Queen 433,

pou hy3e kyng 596, etc.

2)の例——*pe hy3e gate* 395, *pe fowre beste3* 886, etc.

3)の例——*hyr fayre face* 169, etc.

この場合の *-e* の存在は比較的安定している、が、中には、*pe fyrst day* 486, *py hy3 hylle* 678. のように無語尾のものにぶつかるのである。後者は *hylle* の *h* のために *hy3* の語尾 *-e* が無声化され、ついで脱落したと考えられる。

(c)Definite Article と Definite Adjective

この二つに用いられている語の全てを図示すると、下図の如くなる。

Definite Article	<i>pe, the ; pat, that ; pysse</i>	
Definite Adjectiue	sg.	<i>pat, that ; pis, pise, pys ; this, thys</i>
	pl.	<i>po, pose ; pys(e), pis(e) ; pese</i>

定冠詞の *pysse* は強勢語にする為にこの語形となったと考えられる。即ち

Py^ˈto^sly pen^ˈkande vpon py^sse, 370

(Towards a forest I proceeded in the direction)

p, *th* のいずれを書くかの区別は、はっきりしないが、*stanza* の始まりでは、*th* を用いている。

〔2〕 *-ly* 又は *-lych* をとる形容詞

この語尾をもつ形容詞は一つの特徴をもっている。それは、比較級、最上級に、*-loker*, *-lokest* という語尾をとることである。この語尾の語原は

late OE の *-lucor*, *-lucost*; *earlier* OE の *-licor*, *-licost* から発展したものである。が *Pearl* では *loueloker* 148 の比較級が一例あるだけである。

〔3〕 比較級と最上級

次に *Pearl* に使用されている比較級, 最上級を図示すると下記の如くなる。

下記の表から, 比較, 最上の両級の語尾として, *-er*, *-est* が圧倒的であることがわかる。*gentyleste* は定冠詞の後にあるため *-e* が付加されているそれは *beste*, *drest* 860, *kest* 861 と押韻しているため, *-e* は見掛だけで, 無声音と考えるのが妥当と思われる。*Pearl* では, この無声音 *-e* の付加

feier 103	lesse 339, etc.	beste 863
more 128, etc.	lasse 491, etc	aldest 1042
loueloker 148	alder 621	blypest 1131
glader 231	myryer 850	gentyleste 1015
nerre 233	les 876, etc	gladdest 1109
calder 320	schyrrer 982	laste 547, etc.
	bryzter 1056	fyrst(e) 486, etc
		myryst 199, etc
比 較 級		最 上 級

されている例が多い。*laste*, *fyrste* も上述の二つの理由のどちらかに該当する。*alder*, *aldest*; *calder* は, それぞれ *olde*, *colde* の幹母音変化によって出来たもの。この母音変化によって比較級, 最上級をあらわす語法は, 言語的には *western* の特色であり, *Pearl* が *North-West Midland* の方言で書かれた証拠を与えてくれる。

代名詞 (Pronouns)

〔1〕 人称代名詞

(a) *ho* と *scho*, 3 人称の女性単数の主格 *ho* は *North-West* 地方の特色ある語形の一つである。この詩に於いては, 1 例外を残して, すべて *ho* が用いられている。例外は *scho* で次例のみで使用されているにすぎない。

格 人称		主 格	属 格	对格, 与格	所有代名词	再帰代名词
1 人 称		I	my myn	me	myne	myself myselven
2 人 称		pou pow thow	py(e)	pe		pyself pyselven
3 人称	男性 (m)	he	his hys	hym	hysse	hymself
	女性 (f)	ho scho	hir hyr her	hir hyr		
	中性 (n)	hit hyt	hit			hitself

単 数 形

人 称 \ 格	主 格	属 格	对 格, 与 格
1 人 称	We	oure	vus
2 人 称	ʒe	your yor	yow
3 人 称	pay	her	hem

複 数 形

‘My makelez Lambe pat al may bete’,
 Quod *scho*, ‘my dere destyné’, 758—759
 (‘My matchless Lamb who can amend all’,
 Said she, ‘My destiny.’)

この *ho* に関して Gordon の説明を引用すると

This pronoun still survives in the North-West in a stressed form *OO* (implying a ME *ho*) and an unstressed (ə), usually misspelt *her* in modern dialect writings.

(1)

(1) Gordon, *op. cit.*, Appendixes p. 110.

(b) *hit* の中性単数属格の用法がみられる。

Lorde, dere watȝ *hit* adubbement! 108

(Lord splendid was its adornment!)

So dere watȝ *hit* adubbement. 120

(So glorious was its adornment)

Er mynde moȝt malte in *hit* mesure. 224

(Before the mind could comprehend its value)

上記の3行に於いて *hit* が属格として用いられている。この *hit* に関して Gordon の説明を再度引用すると。

...first recorded in this group of poems, and still known (in the form 'hit') in modern dialects of Lancashire, Cheshire, and part of the North-West. But the Genitive 'hit' was not peculiar to the North-West, but was perhaps better established in general use there than elsewhere, since only in the North-West is there medieval evidence of it, and it now survives only in that region.

(Gordon *Pearl* Appendixes, Pronoun, p. 110)

前記人称代名詞の表からも明らかなように Mod E の *its* の形は *Pearl* では用いられていない。

(c) Emphatic Pronoun; 人称代名詞に *-self*, *-selven* がついた形のみで独立して用いられている場合がある。即ち,

Hatȝ a property in *hytself* beyng 446

(Has a special virtue in its own nature)

の *hytsely* は恐らく *its own* の強意の為に用いられたものと Gordon は推定している。(Ibid, Glossary, *hit* p. 136.)

(d) 単数としての *ȝe*

所謂敬称複数のことである。*Pearl* に於いてはこの *ȝe* と *pou* の使いわけは、非常に大きな効果を作品に与えている。作中の主要人物である, *dreamer* が夢中で、死んだ娘とまじえる対話がそれである。*pou*, *ȝe* の適当な使いわけが、互の心理の動きと微妙に絡んで巧みに用いられている。

即ち、娘が父親に初めて挨拶をした時には、*3e* を用いていて(257—58)、そのあとはずっと *pou* を用いているのは、*3e* が、年長者、身分の高い者に対する敬意、或は儀礼的、形式的な表現であり、*pou* は親しさを示すのが中世の慣用であったことを考えれば、娘のこの言葉使いは、礼儀を弁まえていると同時に、父に対する親しさが、自然に発露していることを示しているといえる。一方、*dreamer* の方は、最初からずっと娘に対し *pou* を用いている。が、娘との問答で、彼女に、不信仰や、不遜な言行を厳しく非難されるや、一転して、*3e* と娘を呼ぶようになる。更に宗教問答が進み、みずからが攻勢に出るや、再度、娘を *pou* と呼ぶのである(423, 473)。これなど、*3e*, *thou* のもつ言語の特色だけで、*dreamer* の心理の起伏を巧みにあらわす作者の手並を示した例となる部分だと思われる。又、娘が、*dreamer* を説諭するために引用した聖書中の寓話の部分で、労働者達が、自分達の主人に対して、*pou* といっていることは、彼等の無礼を示し、後で、報酬が少ないことも、彼等のそうした、いたらなさにも原因があることへの伏線ともなっている。(556)。こうして(360—85)(423—73)にかけての、*3e*, *pon* の適当な用い方は、作者の言語感覚の鋭敏さを如実に証している部分であることを指摘しておきたい。

更に *3e* には、一般的用法として、*anyone*, *one* の意味で使われている場合がある。即ち、

3e remen for raupe wythouten reste, 858

(You (=one) are crying out for grief without intermission)

pe hy3e trone þer mo3te 3e hede, 1051

(You=anyone could see the exalted throne there)

pou と *3e* の区別は既に不明瞭になりだしていたが、まだ *3e* を *pou* の意味で使うのは慣用的用法くらいで、一般的には、*nuance* の違いがあったと考えられる。

(e) そのほかでは、3人称複数で、主格に、*þay*, ほかの格で *hem*, *her* が使用されていることも注意すべきことである。又、*myselven* 52. が再帰代名詞として用いられ、*myn* 566, *hysse* 418, の2つの所有代名詞用

法も見い出す。

〔2〕 指示代名詞(Demonstrative Pronoun)

指示代名詞として, *Pearl* に存在するのは, *pat*, *that*, *pysse*, *this*; *þise*, *pese*; *po* (one of them), *pos* (them) の8語である。なかでも *pat* の使用が圧倒的で, ほかは1回限りである。即ち 421, 370, 384, 551, 555 557, 517 の各行で用いられているにすぎない。Mod E からみて, その用法の変っているのは *po*, *pos*, の2形であろう。*pysse* は強勢語として用いられている。

〔3〕 不定代名詞 (Indefinite Pronoun)

al, all	bope	mon, man	men	non	on
oper	such(e)	sum, summe	vchon	who, quo	quat-so, what

上記の表は *Pearl* 中に見い出す不定代名詞を示したものである。 *such* は nom. pl., *suche* は dat. pl として各, 716, 719 行で用いられている。*mon, man* は *mon* が圧倒的で *man* は少ない。これらは, 165, 194, 334, 799, で *one* の意味として用いられている。更に *mon, man* は *vch*, *no*, *many* と結合して, それぞれ, *everybody*, *nobody*, *many people* の意味をあらわしている。即ち, *vch mon* 323, 603, etc., *no mon* 67, *many mon* 340.

Men に関しては2つの用法があった。1つは Mod E の *they* に相当し, 他方は *one* の意味をあらわした。*men=they* は 728, *men=one* 331, 336, この *men* が単数の例は次例であきらかである。即ち *men* を *he* が受けているからである。

What serveþ tresor, bot gazeþ *men* grete

When *he* hit schal efte with teneþ tyne? 331—332

(What does treasure serve but make one weep/When he must often lose it with bitter sorrow?)

who, quo は *whoever*, *one who*, *you who* の意味をあらわしている。

(各709, 693, 344)。 *quat-so*, *what* は *whatever* をあらわす。(566, 532)

〔4〕 疑問代名詞 ((Interrogative Pronoun))

what, quat	186, 249, 293, etc
who, quo	427, 678, 747, 927, 1138, etc

上記4形のみが, *Pearl* で疑問代名詞として使用されている。spellingを除けば ModE と変らぬ用法である。註。(疑問形容詞も此処に含めた。)

〔5〕 関係代名詞 (Relative Pronoun)

Pearl で用いられている関係代名詞は *pat*, *wham*, *quam* の3形である。しかも, *wham* 131, *quam* 453, を除いたほかの全てに *pat* が用いられている。

ME に於いては関係代名詞の斜格は, 更に人称代名詞を節中に挿入して用いられている例が珍らしくないが, *Pearl* にはみられない。しかし同じ group の *Sir Gawain* の中には, その例がある。

pat alle prys and prowes and pured pewes

Apendes to *hys* persoun, and praysed is ever 912—913.

(1)

(To Whose person belong all excellence, prowess and noble manners, and who is praised at all times)

pat と *hys persoun* でもって, ModE なら *whose person* になる訳である。がこの用法が *Pearl* ではみられず, 斜格の *wham*, *quam* が用いられていたことは注意すべきものと思われる。

(a) *pat at*

Pearl の中で, 関係代名詞中, 最も特色ある語形がこの *pat at* である。即ち, *that which* の意味であるが, もとの形は *pat pat* である。この前の *pat* の *t* と, 後の *pat* の *p* が, 同化して一音となって発音されたことに原因がある。即ち [θətət] と発音され, これが, spelling に影響して, 発音通りに綴られたことによる。 *pat at 3e moun* (what you

(1) J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon, *Sir Gawain and The Green Knight*, Oxford, 1963. による。

can) 536, の *at* は従って, 前置詞と見誤まらぬ必要がある。更に Gordon の説明を引用すると *pat at 3e moun*: ‘what you can’. *At* as a relative appears not uncommonly in northern texts and appears to be derived from ON. *at*, but here, as K. Sisam has observed, *pat at* is more likely to be a development of *pat pat*, through the intermediate stage ‘*pat that*.’……(Gordon *Pearl* note on l. 536.)

以上が, *Pearl* 中の代名詞の語形及び注目すべき語法上の諸点である。次に, 変化語尾を有する最後の語である動詞について述べる。

動詞 (Verbs)

〔1〕 不定詞

(a)-*en*, (b)-*e*, (c)無語尾の3形がある。(a)には vocalic stem の後にきた場合 -*en* の *e* が落ちた縮小語 *gon* 820 を含めて, *leven* 69, *dyscreven* 68, *meten* 1032, の4例のみ。(b)は行末にあって rhyme-word になっている動詞に多い。 *saye* 3, *sprede* 25, *wene* 47, *gesse* 499, *dresse*, etc. (c)行中にある場合に多い。 *pay* 524, *haf*, 577, *com* 676。又, フランス語起原の動詞は, イギリスのそれと比較して無語尾が多い。 *adaunt* 157. *ceuer* 319, *bray* 340, etc, 語幹が強勢のない音節で終る finite verb には語尾はつかない。 *heuen* 16, *ceuer* 319, *fayly* 34, *wony* 284, etc. 但し, *byye* 478, 732; *ly3* 930; *saye* (often) などは, 2, 3 人称単数の形から作り直されたためにこのような例外的存在となっている。

(1) To-Infinitive と Split Infinitive.

split infinitive の例は1つで, 詩の冒頭部分にある。即ち *To clantly clos in gold so clers*, 2. しかし *To clantly clos* の *To* を *too* と考え, *clos* を形容詞と考えることも出来ると思われる。Gordon は *Sir Gawain* にも split infinitive の例があるとし, (11, 88, 1540, 1863), 又, split infinitive は *Pearl* の書かれた時代, 珍らしい用法でなかったことなどから, split infinitive 説をとっている。しかし, ここでは, 他の同時代

(1) J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon, op. cit.

の Texts や参考文献の考察をしていない以上、断定を避けて、split infinitive の可能性を指摘するに留めたい。

To-infinitive に関しては、3つの形がある。それらは、to-infinitive, for to-infinitive, inflected infinitive である。中でも、少数用いられている、inflected infinitive はOEと同様、目的をあらわすために用いられている。それらは、*to sene* 45, *to-done* 914, *to dyscreven* 68である。他の2つは頻出する形である。注目に値するのは、助動詞が原形不定詞でなく、to-infinitive をとっている用法があることである。即ち、

*ʌ*twyth *to* *se* þat clene cloystor/þou may, bot inwyth not a fote
969—970; And rewfully þenne I *con* *to* *reme*. 1181.

既に to-infinitive の用法は、ModE 同様、使用頻度が高くなっている、このような極端な例を生んだが、この形式を何故、作者が用いたかは、決定しがたい問題であるが、筆者には、詩作上の技法が、特に rhythm の効果のために、相当影響していると考えられる。作者は、rhythm, rhyme などの技法を、かなり自由な、思い切った用い方を試みているからである。例えばこの助動詞と to-infinitive の結合も *to* の存在は、強音節同士の連続を防ぐ為に作者によって用いられたのではないかと推定される。それ程強音の連続が Pearl では少ない。(上記引用参照)

(2) その他の Infinitive の特色

(a) Complementary Infinitive

補語として用いられた例で、下記の2例とも ModE ではない用法である。bare-infinitive が補語になっている。

þat wont watȝ whyle *devoyde* my wrange, 15.

No sauerly saghe say of þat syȝt, 226.

(Who was wont to get rid of my hurt 15)

(Tell adequately of that sight 226)

(b) Participle に近い用法

To þenke hir color so clad in clat, 22

(Thinking of her complexion wrapped round so by clay)

To make þe quen þat watȝ so ȝonge, 474

((By) making thee queen who was so young)

(c) Absolute and Conditional Use

即ち, þe soþe to telle (to tell the truth 653) と By þe way of ryȝt to aske dome, 580 (If they demand an award according to strict justice) の例がある。

〔2〕 Indicative Present

次に, indicative present にあらわれる語尾を表記すると

		単 数				複 数	
1	人 称	-e,	—,	-eȝ		-en,	-e
2	人 称	-eȝ,	-ȝ,	-s,	-tȝ	-eȝ,	-tȝ
3	人 称	-eȝ,	-es,	-ȝ,	-s,	-tȝ	

(a) -ȝ, -s, -tȝ

2, 3 人称単数形の単音節語幹の動詞につく。dotȝ (2p. and 3p. sg.), gotȝ (4p. sg.), saytȝ (3p. sg.), says (3p. sg.), saȝ (3p. sg.), hatȝ (2p. and 3p. sg., sayȝ (2p. sg.), etc.

(b) 一人称単数及び複数の語尾, -eȝ の用法は注目すべき用法である。主語が2つ以上の動詞をとる場合, 最初の動詞は, -e をとるか無語尾で, 二番目の動詞は -eȝ をとっている。

For I *am* goude and non byswykeȝ 568

Twelve or syȝeȝ on ȝer pay *beren* ful fryon

And renowleȝ nwe in vch a mone 1079—1080

この表現は作者の技巧的表現でなく, 慣用的に, 北方や North Midland 地方で用いられていた用法であり。Gordon は今日でも, これらの地方で用いられていると指摘している。⁽¹⁾

(c) 複数語尾 -eȝ, -tȝ

これらも, 2p. sg., 3p. sg. の語尾 -eȝ, -tȝ と同様単音節の動詞につ

(1) Gordon, op. cit., p. 65.

く。 *schyneȝ* 28, *mounteȝ* 351, *atslykeȝ* 575, *Pykeȝ* 573, *woneȝ* 404, *gotz* 510。

(d) *say*, *make*, *take* の縮小形。

これら3動詞には特別な縮小形が存在する。即ち, *saȝ* (3p. sg. 689) *sade* (pt. sg. 532); *matȝ* (3p. sg. 610); *totȝ* (3p. sg. 513)。

註, これらの, 縮小語に関しては, Gordon の *Pearl* の Notes, p. 64 と p. 70 に詳細な解説がある。それによると, 音韻論的原因と綴字の変化から派生したことが主因と述べている。紙数の関係及び音韻論や spelling に関しては, この論文で扱ってないので, 語形の指摘に留める。

〔3〕 Indicative Past

(a) Strong Verbs

単数形は語尾がないのが普通である。見掛け上 *-e* のついているものがあるが, rhyme やそのほかの理由から発音はされていなかったと推定される。例えば, *sprange* 13 (*e* は *e* が無声音であることを示す)。

複数形は *-en*, *-e* 及び無語尾の3形。 *weuen* 71, *trone* 1113, *fazt* 54, *nom* 587, など。

(b) Weak Verb

単 数			複 数
1	人 称	<i>-e</i> , —	<i>-en</i>
2	人 称	<i>-eȝ</i> , <i>-e</i>	<i>-e</i>
3	人 称	<i>-e</i> , —	—

単数形では, 1, 3人称は, *-e* をとるか, 無語尾であるかのいずれかである。 *bytaȝte* 1207, *bowed* 126, *bylde* 123, *abated* 123, etc.

2人称では, *eȝ*, *-e*, 無語尾の三形, *lesteȝ* 269, *lyȝte* 247, *aglyȝte* 245, etc. 複数形の例は, *forbidden* 124, *brayde* 712, *departed* 378, etc.

2人称単数の歴史的に正当な語尾は *-eȝ* であるが, 上述のように混同が起っているのである。又 *-ed* で終る, 過去形は, 更に *-e* をとって *-ede* になることは, *Pearl* では1例もない。 *caȝt* 50,, *wroȝt* 555 等の, こ

のような形は -ede の最後の -e が消失したと考えられる。

〔4〕 Subjunctive

単複，過去現在，全人称にわたって，-e をとるか，endingless かである。

Present: *leue* 865, *dryue* 1094, *marre* 359, *gef* 1211, *com* 598, *braundysch* 346, *feche* 846, *forloyne* 368, *go* 530.

Past: *sponne* 35, *syze* 308, *syȝ* 698, *com* 574, 723, etc, *swalte* 1160, etc.

For *marre oper maddle, morne and mype*, 359

(For even though one lament and behave madly, moan and conceal one's feeling') 以下例を上げると，

Lest les pou leue my tale farande, 865

Er þenne þe day glem dryue al doun, 1094

He gef vus to be his homly hyne/And precious perleȝ vnto his pay, 1211—1212

……as any do/*Braundysch and bray py brapeȝ breme*, 345—346

〔5〕 Imperative

Singular: -eȝ, — (但し 'e' のついていることもある)

Plural: -eȝ, -tȝ, -s (-tȝ, -s は単音節の動詞につく)

単複両形の命令形がある。

sg. — *stynt* 353, *kypeȝ* 369, *dysplesez* 422, *breue* 755, *cum* 763, *tech* 936, *bow* 974, etc.

pl. — *wyrkeȝ* 536, *gos* 521, *dotȝ* 521, *gotȝ* 535, etc.

〔6〕 Present Participle

1 例を除くと，*Pearl* では現在分詞は，すべて語尾に -ande がつく。この -ande は，Nothern から West-Midland の方言の一特色をなす現在分詞を作る語尾である。それ故に，この詩が，North-West Midland の方言の一つで書かれている有力な証拠となるのである。これは非常に大切な点である。

-*ande* 以外の語尾の 1 例は, - *yng* である。即ち *sykyng* 1175 である。

And, *sykyng*, to myself I sayd, 1175

-*ande*——*blysnande* 163, 1083; *glemande* 70, 990; *syangeande* 111.

raykande 112; *stremande* 115; *glysnande* 165, 1018

gladande 171; *penkande* 370; *longande* 462;

sulþande 726; *lesande* 837, etc.

Wyth a *rowmande* rourde *raykande* aryzt, 112

この行は, 現在分詞の例と同時に, r 音の alliteration の美しい例としても有名な所であり, *raykande* の最後の *e* は無声音ではないかと, Gordon は推定して, -*ande* の final *e* は無声音の場合もありうると指摘している。

(1)

〔7〕 Past Participle

(a) Strong Verb

-*en*, -*n*, 稀に -*e* の語尾を有し, 僅かの例で -*e* が落ちている。*coruen* 40, *schorne* 213, *bore* 239, etc. 注目すべき語例は, 過去分詞を示す接頭語をもっている例である。*ichose* 904. これは, 韻律上の必要から生じたものとする。即ち

To Kryste^x chambre^x pat^x art^x ichose^x

と強弱の rhythm がつき *i* は強勢音節の連続を避けようとしてつけられたものと思われる。

(b) Weak Verb

-*e* が付加されることが多い。従って, 語尾としては, -*ede* と -*ed* の 2 つがある。*abroched* 1123, *aloynte* 893, *appassed* 540, *aquylde* 967, *arayde* (in rime) 1166, etc.

Pearl に於いては, weak verb の類別は比較的容易である。それは,

(1) pt. 及び pp. の語尾 -*d*. -*t* の前に *e* のないもの, -*d*(*e*), -*t*(*e*). (2) -*ed*(*e*), *et*(*e*) となるものの 2 類のみである。(1)の例: *re*rt(pp.) *leste* 269

(1) Gordon, *op. cit.*, Appendixes p. 112.

(pt.) *mad*(e) 371, 953 (pt., pp.), etc. (2)の例: *demed* 361, *leued*(pp) 978, *dyzed* 828, 705, etc. この群にあっては, OE の weak verb の Class 1 から派生したもの, 即ち *-de*, *-te* が直接語幹に接続して出来たものや, 他に OE の Class から特に Class 2—このクラスは pt. suffix が *-ede*, *-ode* で終る—から由来している。が, しかし, OE の weak verb の分類は ME になって大いに混乱をした為に, *Pearl* 中の weak verb についての確実なよりどころとなりえぬことに注意しなければならない。

〔8〕 Preterite-Present Verb

Pearl でみられるのは, *can*, (*con*), *dar*, *may*, *mot*, *schal*, *wot*, の 6 語である。

(a) *con*, *can*: 本動詞, 助動詞の両方に用いられている。本動詞としては, 3p. sg. pres. *con*; 2p. pl. pres. *con*, *conne*; pt. *cowþe*, *couþe*; 2p. sg. pt. *cowez* の形で用いられ, そのほかの形はない。助動詞としては, 2p. sg. *conez* のみである。

(b) *dar*: pres. *dar*; pt. *dorste* の二形で, 前者は 1089, 後者は 143, 182 で用いられている。

(c) *may*: sg. *may*; pl. *may*, *moun*; pt. sg. *myzt*, *mozte*; 2p. sg. pt *myzte*; pt. pl. *mozt*, *myzt*。だけである。*moun* (<OE. *mugon*) 579, *myzte* 317, *myzt* (pt. pl) 579。で 1 度ずつ用いられている。

(d) *mot*: 願望をあらわす場合と, *must* に相当する場合がある。*mot* (pres.) が *wish* をあらわしている, *mot þe bytyde* 379 (now, bliss may befall to thee!) と *must* の意味では, 25, 31, 320, 663 で用いられている。*moste* (pres. sg.) の場合は, 319, 348 行で, *moste* (pt. pl) の意味では 623 行のみで用いられている。

(e) *schal*: 1p. sg. *schal*; 2p. sg. *schalte*; 3p. sg. *schal*; pt. *schulde*。これら 4 形のうち, *schalte* は 1 度だけ用いられている (564)。Preterite future をあらわしている *schulde* の例がある。即ち, *When schulde start in þe strem astray* 1162 (When I was about to rush astray into the stream.)

(f) *wot* : 現在形では, 1p. sg. *wot, wate*; 2p. sg. *woste*; 過去形で, *wyste*; 2p. sg. *wysteȝ*. *wate* は 502 行で1度用いられているだけである。

扱て, このグループの動詞群のうち, 興味深いのは, *con* の用法である。(1)Mod E の *did* に相当する働らきをする場合。(78, 81, 149, 313, 1183, など), (2)意味があまりなく, 動詞と共に用いて, 現在時制を与える。(例えば *con bere* 1078 は, たんに *bere* だけと同じなのである。271, 294, 495, など)。この(2)の用法は, *Pearl* の言語の特色で, *Purity*, *Patience*. *Sir Gawain*などの言語と比較してみても, みられる言語上の不一致の例だと, Gordonは指摘をしている。それによると, *Pearl*が, ほかの⁽¹⁾ 3作品と違い, 韻律上の規律が強いと述べている。又, *con=did* の用法は *Pearl* に於いて最も多用され, 次いで *Sir Gawain*, *Purity* の順になっている。これは rhyme されている率の高低と比例している。(*Purity* は unrhymed verse, *Sir Gawain* は部分的に rhyme している所がある)。注目すべきことは, (2)の場合, 動詞が rhyme-word になること, 又, (1)*con=did* の場合, 殆んど動詞は行中に存在することである。*pat pike con trylle on vch a tynde* 78. の *con trylle* は *quivered* の意味になる。 *can* は 499 行で用いられているだけで, ほかは, すべて *con* が用いられている。

[9] Anomalous Verb と Incomplete Verb

このグループに属する動詞は, *be, do, gon, watȝ, wyl*, の5である。これらの *Pearl* の中で, 用いられている語形をあげると,

(a) *be*

am	ar, arne	arte	be	betȝ	ben(e)	ben	is
----	----------	------	----	------	--------	-----	----

am (1p. sg. pres.) 246, 335, etc ; *ar, arne* (pl. pres.) 384, 402, 628, 928, etc ; *arte* (2p. sg. pres.) 242, 276, 707, etc ; *be* (原形とし

(1) Gordon, *op. cit.*, Notes, p. 63. の *conezȝ* についての項参照

て) 29, 281, etc ; (subj : pres.) 379, 470, 523, 572, etc ; (imper. sg.) 344, 406 のみ ; *betȝ* (3p. sg. future) 611, 即ち, No blyss *betȝ* fro him reparbe (no bliss will be barred from them) ; *ben(e)* (pl. pres.) 572, 785 のみ ; *bene* (past participle) 252, 373 ; *is* (3p. sg. pres.) 26, 33, 309, etc.

(b) *do*

<i>do</i>	<i>dotȝ</i>	<i>don</i>	<i>dyd</i>	<i>did</i>	<i>dýt</i>	<i>dyden</i>	<i>done</i>
-----------	-------------	------------	------------	------------	------------	--------------	-------------

do (1p. sg. pres) 366 ; *dotȝ* (3p. sg. pres.) 17, 338 ; *do*, *dotȝ* (imper.) 718, 521 ; *dyd*, *dýt*, *did* (pt. sg.) 102, 681, etc ; *dyden* (pt. pl.) 633 ; *don(e)* (p.p.) 250, 1042, etc, 即ち, as to *done* (to be done) 914.

(c) *gon*

<i>go</i>	<i>gotȝ</i>	<i>gos</i>	<i>gon</i>
-----------	-------------	------------	------------

gon (原形) 820 ; *gotȝ* は (3p. sg. pres.), (3p. pl. pres.), (imper. pl.) で用いられている。それぞれ順に, 365 ; 510 535。 *go* (subj. sg. と imper. sg.) 530, 559。 *gon* (p.p.) 63, 376。

(d) *watȝ*

<i>watȝ</i> , <i>wace</i>	<i>wer(n)</i> <i>were</i> <i>ware</i> <i>wore</i> <i>wasse</i>
---------------------------	--

watȝ, *wace* (pt. sg.) ; *wace* は rhyme-word としてのみ用いられている (65), ほかはすべて *watȝ*。 *wer(n)*, *were*, *ware*, *wore*, (pt. pl.) 68, 71, 151, 1027, etc。 *wasse* (pt. pl.) 1108, 1112 のみで共に rhyme-word として用いられている。 *wer(e)*, *wore* (subj. sg.) 142, 288, etc ; *wern wore* (subj. pl) 451, 574 のみ。

(e) *wyl*

wyl, *wolde* の 2 形のみである。 *wyl* は, (1)願望をあらわす場合 (443), (2)意図を示す場合 (558), (3)未来をあらわす助動詞の機能の強い場合 (350, 965), (4)仮定法の中で願望をあらわす場合に (794) それぞれ用い (51)

られている。*wolde* (pt) 304, 390, 391, etc で用いられている。

II Inflectional Endings

今迄に述べてきたことから語尾が重要な働きをしていることが明らかであると思われるが、中でも、特に注目すべき働きの幾つかある。それで、語形論に加えて、それに深い関連のある、これら、語尾の問題を扱うことにする。まず、*-e* 又は *-ez*, *-es* 中の *e* (以下 *e* とする) が有音であったか、無音であったか、これを決定するのは困難で、類推的にしか決められないのであるが、次のように2通りの場合が考えられる。即ち、(1) *-e* 又は *e* が有音である。(2) *-e*, *e* が消失している。(1)の場合は、強調のため、休止を示すため、文法的明確さを与えるため。などで、(2)の場合は、強勢がかからぬ時、母音や、*h* ではじまる語の前にきた時に、多く *e* が消失している。しかし、これは、あくまで、比較の問題で、絶対的なものといえないことは、*Pearl* の言語だけについても明らかである。例えば(2)の条件を備えていても、或る文法的事項の方が、他のそれよりも、*e* が残っていることが多い。一例を上げると、*-en* 語尾の縮小形 *-e* は、比較的残存率が高い。が、early ME. の過去形の語尾 *-ede* の final *e* は *Pearl* に於いては一貫して消失しているのである。名詞の単数与格の *-e* も消失していることが多い。*spot* 12, *clat* 22, などに対し、*spotte* 24 など *-e* をもつ語は僅かである。更にこの語尾 *-e* は行中より、行末で安定している。そうして、語原的にも、文法的にも、その由来が正しい *-e* を、*rhyme-word* がもっている場合、*rhyme* していることから、この *-e* は発音されていたと考えられると、Gordon は云っている。⁽¹⁾ 例えば次のような例がそれにあたる。

slepe pres. pl. 115, *dowyne* pres. 1p. sg 326, *bete* pt. pl. 93, *forzete* infin. 86, *deuyse* 99, *swepe* 111, *wade* 143, *fare* 147, etc

この場合も *-e* が無音とみるべき例がある。*wente* pt. pl. 631は *innocent*

(1) Gordon, *op. cit.*, Appendixes, p. 106—108.

と rhyme していることから、同様に *byte* 640 は *parfyt, delyt* などと rhyme していることから無音であろう。。

-e が行中で消失していることが多いのは、ME の詩作法上 spelling の慣習的用法に *Pearl* の作者が従っているからと、これは重要な指摘だが、*Sir Cawain* から得られた evidence から、この写本の写字生は spelling の点で、不注意な点があると、Gordon は指定している。⁽²⁾それによると、*arte* 707, *woste* 293, *welke* 101, *rounde* 5, *fryte* 29, *corne* 49, *colde* 50, *bere* 67, などの -e は、語原的にみて、決して、発音されなかったような語に -e が付加されている例としている。そうして、写字生の独断で -e の付加、又は、消失させた例として、*adubbenente* 72 (*glent* と rhyme) ; *counsayl* 319 (*boyly, fayly* と rhyme) をあげている。が、筆者は、これらの、どれが、写字によって起ったかを明言することは困難であると思う。更に、困難を増すのは、*Pearl* の metre が行中に於ける、この -e の有音、無音を決定する指標となっていないことである。それは、*Pearl* の詩人は、*dip* の配置、音節の数などを、独自の考えで、自由に決めていたと思われるからである。しかし、(他方ではこの、比較的自由さが、この詩の詩的価値を高めているのだが)

pat dotz bot pryçh my hert þrang, 17

(That action does only afflict my heart grievously)

上例のように、強勢の音節が、特に後半の2つの強勢が直接に接する例は、*Pearl* ではきわめて少ない(17, 122, 286, 381, 486, など)。それを避けるため、弱音節の *e* を付加したこともありうるし、特に後半の2強勢音節の接触を避けようとする傾向が作者にあったのではないかとする Gordon の説は当を得ているかもしれない。

Elision : elision も、明確な説明が困難であるが、Chaucer をはじめとする、ME でよくみられる *the* と母音又は *h* ではじまる語の結合による、*the* の *e* の消略が、85行の *the adubbenente* でありえたかもしれない

(2) *Ibid*, Appendixes, p. 107.

い。一方、人称代名詞, *me, þe, he* などは、決して、*e* の省略はされなかったようである。

そのほか、歴史的に根拠がないと思われる *e* の存在がある。例えば、*wot* に対し *wate* (*date* と rhyme 502) 同様な例として、*owe* 543, *myne* 335, *Sir Gawain* にも *schale* 1240 がある。恐らく、これらは metre や rhythm のためか、*wace, wasse, pysse* にみられるように、emphasis の必要のために用いた、作者の創造によるのではなからうかと思われる。

-e3 -es, -en, -ed, -et : これらの語尾については、liquid か nasal consonant の後では、*e* の省略が、時として起っている。*heuen3* 423, cf. *heuenez* 423, 620 ; *straynd* 1173, cf. *unstrayned* 248

語原的に根拠のない *e* が compound や derivative の第一要素の終りに挿入されて用いられている場合がある。即ち、*arepede* (*arpede*), *holte-wode3* (*holttwode3*), *mysetente* (*mystente*), *loueloker* (*louloker*), *longeyng* (*longyng*), *stropemen* (*stropmen*), それぞれ、771, 75, 258, 184, 244, 115。これらの *e* が、たんに graphic にすぎないか、発音されていたか、何故 *e* の挿入が必要か、など、問題が生ずるが、後の研究をまたねばならない。が、metre, rhythm のため、発音を容易にするためとか、文法的明確さを期すといったような理由が考えられる。ということを描き出すに留めたい。以上が、変化語尾の働きで、注目すべき問題点と思われるものの整理である。

III Characteristic Expression

最後に Syntax のごく一部分であるが、*Pearl* の構文中で、特に目立つ、構文を取り上げた。一般的なことをいうと、構文が単純であることは、*Purity, Patience, Sir Gawain* と比較することで、おのずから、明らかである。即ち、

(8) J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon, *Sir Gawain and The Green Knight*. Oxford, 1963 による。

þay wakened wel þe wroþeloker, for wroþely he cleped, *Patience*
132 (1)

And alle his fetures folzande, in form þat he hade, *Sir Gawain*
145 (2)

Syþen in þat spote hit fro me sprange, *Pearl* 13

更に *Pearl* の構文や言語の特色は、そのまま、West-Midland (特に Lancashire) の方言の特色であることが殆んどである。

〔1〕 Impersonal Verb

これは *Pearl* 独特のものとは勿論いえない。ME に広くみられる用法である。しかし、構文として、見逃がすことの出来ぬものである。

3et þoʒt me neuer so swete a swange, 19

And ever me *longed* ay more and more, 144

My *lyste* to se þe broke byʒonde, 146

And euer me þoʒt I schulde not wonde, 153

Me þynk þe *put* in a mad porpose, 267

Me þynk þe *burde* fyrst aske leve, 316

þurʒ drwry deth boʒ vch man dreve, 323

þe oʒte better þyselven blesse, 341

ʒif hym *repente*, 662

Yow *behod* have, wythouten dout, 928

Hem *nedde* nawþer sunne ne mone, 1044

上例から, impersonal verb は次に to-infinitive も bare-infinitive のどちらもとることがわかる。又, 267, 316 では, infinitive *put*, *burde* が, 更に impersonal verb である。

〔2〕 *Hit arn* の結合

hit が複数動詞 *arn* と結合すると, *hit* は þay 即ち *they* を意味する

(1) H. Bateson, *Patience*, 2nd ed, 1918.

(2) J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon, *op. cit.*,

という、きわめて特色のある用法である。

And to þe gentlyl Lombe *hit* *arn* anioynt, 895

(And they are united to the gentle Lamb)

Lord, mad *hit* *arn* þat agayn þe stryuen, 1199

(Lord, they are mad who resist against you)

これは Concord の上からいえば、主語と動詞の人称、数が、不一致していることになる。

〔3〕 Pleonastic *hit*

Mod E の用法からみれば、余分なものである *hit* が文中にある場合でこれは接続詞 *that* にもみられる用法である。

On huyle þer perle *hit* trendeled down, 41

(On the mound of the grave where the pearl rolled down)

þat precious perle þer *hit* was pyȝt, 228

(That precious pearl was set there)

接続詞 *þat* の pleonastic な用法は、他の接続詞や疑問詞と結びついて用いられている。

Ne *how* fer of fold *þat* man me fleme, 334

(nor how far one banish me out of land)

Tyl to þe fyrst *þat* þou attenȝ, 548

(Until thou reach the first one)

ほかに、958, 979。

〔4〕 Impersonal *hit*

hit が非人称的に用いられた例である。

For if *hit* watȝ fayȝ þer I con fare, 147

(For if it was fair where I went)

Keruen and caggen and man *hit* clos, 512

(cut and tie up and make it secure)

そのほかの例は、569, 914, など。

〔5〕 動詞の項で述べた、主語が2語以上の動詞をとる場合、2番目の

動詞の語尾に *-ez* のつく場合である。For I am goude and non *byswy-ke3?* 568.

(詳細は動詞の項参照)

〔6〕 節中の語句が、節外に出ている構文が、*Pearl* にかなり存在する。

On schyldere3 pat leghe vnlapped ly3te, 214

On arme oper fynger pa3 pou ber by3e, 466

Her fygure fyn quen I had fonte, 170

For py to corte quen pou schal com, 701

By3onde pe water pa3 ho were walte, 1156

イタリックの部分は後の節中に入るべきものと考えられる。これらは、*versification* 上の必要が作者にこのような形式をとらせたものと思われる。ほかに、427, 827—28, 880, 892 などの行で見る事が出来る。

〔7〕 主語又は動詞の省略

Pearl の文体の簡潔さは、一つにこの省略体になつてゐるように思われる。それ程、省略が多い。

(a) 主語の省略：*I* の省略が多い。

For meten hit sy3 pe apostel John, 1032

(For I saw the apostle John measure it)

(b) 動詞の省略

pe sunnebeme3 bot blo and blynde (are), 83

No bonk so byg pat did me dere3 (is), 102

Bot vchon fayn of opere3 hafyng (is), 450

pyn angel-havyng so clene corte3 (is), 754

ほかに、203~204, 231, 450, 471, 906, 1014, 1015—1016, 1047, 1076, etc. これらから、*be* 動詞の省略が多いことがわかる。又、運動の動詞の省略の例として、

When pou no fyrre may, to ne fro, 347

(When thou can *go* no farther in any direction)

〔8〕 不定詞、節、及び *pyself* が主語として

(a) *pyself* が主語の例: 298, 313, 776

pyself schal won wyth me ryzt here, 298

(Thou thyself will live with me jyst here)

(b) To-Infinitive が主語の例

Two men *to saue* is god by skylle, 674

(To save two kinds of men according to reason is good)

Me payed full ill *to be* outfleme, 1177

(It greatly displeased me to be driven out)

形式主語として *hit* が to-infinitive をうけている例が1つある。

To pay þe prince oper sete sazte

Hit is ful eþe to þe god Krystyin, 1201—1202

(It is quite easy to the good Christian to please or to propitiate the Prince)

(c) 節の場合は, *pat*-Clause のみである。

Inoze is knawen *pat* mankyn grete

Fyrst watz wrozt to blysse parfyt, 637—38

(It is well known that noble mankind first was created for perfect bliss;)

〔9〕 Predicative *wel*

wel が叙述的に用いられている例で、この場合、主語と動詞は倒置されている。このような用法で、現在でも方言のなかにみられる、*many is the time*……という慣用的表現のあることは周知のことである。

Wel watz me *pat* I watz bore, 239

(It was fortunate to me that I was born)

So *wel* is me in þys doel-doungoun, 1187

(Then it is well with me in this dungeon of sorrow)

〔10〕 Contact Clause

接続詞の働きがなくとも、2つの節が有機的に結合している例が、いく

つかある。

pou says/pou traweȝ me in þis dene, 295

pat leueȝ/oure Lorde wolde make a lyȝe, 304

And sayde/hys ryche no wyȝ myȝt wynne, 722

以上の例は主節の動詞の目的節になっている例であるが、関係代名詞の省略と考えられる例がある。To bye hym a perle watȝ mascelleȝ 732, は To bye hym a perle *þat* watȝ mascelleȝ とすると意味がはっきりする。

そのほかにも、前述した、関係代名詞 *at* の用法（関係代名詞の項参照）、absolute infinitive, *con* の特別な用法、助動詞と to-infinitive の結合、*take make, saye* の縮小形なども、*Pearl* でみられる特色ある表現といえる。最後に、紙数の関係で論述出来なかったが、詩形に於いても、*Pearl* には、独特の style があり、それが、*Pearl* の詩を特色づけている。即ち、Alliteration に加えて rhyme している詩形。同一グループ内の stanza は同一語か同音の語の繰りかえしによって結合していること。更に大きくは、冒頭の

Perle, plesaunte to prynces paye, 1

の *prynces paye* が、最後の stanza group (XX) の linking-word となって現われている着想などと、語形、語法とあわせて研究されなければならないと思われる。⁽³⁾

（付 記）

紙数の関係で、名詞、動詞、代名詞、形容詞以外の品詞や、詩形について述べる事が出来なかった。使用した Text は主に、E. V. Gordon の *Pearl*, Oxford, 1963. である。この論文は、厨川先生の御厚情により、修士論文をもとに、再度、まとめたものである。全体にわたって、御教導下さった、先生の御厚情に、深く感謝する次第です。

(3) このような形式は、*Sir Gawain, Patience* にも用いられている。